

ISSN-2186-8794

明治学院歴史資料館資料集

第14集

大正期の明治学院とその周辺

—ホフソンマー宣教師の書簡より—



“THE MISSION FIELD, JULY 1914” より

明治学院歴史資料館

明治学院歴史資料館資料集
第14集

大正期の明治学院とその周辺

－ホフソンマー宣教師の書簡より－

訳者解説

明治学院歴史資料館研究調査員 齋藤元子

本書は、米国オランダ改革教会海外伝道局発行の月刊機関誌 *The Mission Field* に掲載された明治学院教師ホフソンマー宣教師 (Walter Edward Hoffsommer) の報告書簡を翻訳したものである。

ホフソンマーは、大正期の明治学院を支えた宣教師の一人であった。だが、残念なことに、学院史には、彼の活動に関しては詳しく記されていない。『明治学院百年史』においては、1919 (大正 8) 年、熊野雄七が高齢を理由に中学部長を辞任したことにより、「とりあえず、ホフソンマーが部長代理となり、(中略) その後理事会では、中学部長後任選定委員として、井深、石川、ホフソンマーの三名をあげ、詮衡に当らせた」(285 頁) との記載がある。また、『明治学院百五十年史』においては、大正期の合同キリスト教大学設立運動において、ホフソンマーが明治学院の代表の一人として、他校との合同授業の教壇に立った (177 頁) との言及がある。この二つのエピソードからだけでも、ホフソンマーが明治学院の運営に深く関与していたことがうかがい知れる。

ホフソンマーは、1880 年 8 月 1 日米国カンザス州に生まれ、8 歳の時、一家でペンシルベニア州に転居する。1903 年同州にあるアーサイナス・カレッジ (Ursinus College) を卒業し、YMCA で書記の職に就く。1907 年 7 月 31 日、ミス・グレース・ポージー (Grace Posey) と結婚。結婚式の数週間後、若いカップルは、米国オランダ改革教会海外伝道局の任命により、日本へと旅立つ。

赴任地は東京の明治学院であった。1915 年までの 8 年間、宣教師かつ教師として活動する。ホフソンマーは、朝鮮半島からの留学生に対して、学費の支援や住まいの提供など、親身な世話をしていた。また、留学生も事あるごとにホフソンマーに助言を求めていたことが、留学生の手記に綴られている。

1915 年、休暇で一時帰国した際、コロンビア大学に入学する。大学

院博士課程において教育学を専攻し、日本の教育システムに関する学位論文を提出して博士号を得ている。1917年日本に戻り、明治学院において活動を再開する。この時、ホフソンマーは学校教育の専門家としての資格を備えて、再来日したのである。

1919年、アメリカン・スクール・イン・ジャパンの理事らによる緊急の要請を受けて、同校の校長職に就くこととなり、明治学院を去る。ホフソンマーは校長就任後わずか3年間で、運営に悪戦苦闘する小さなアメリカン・スクールを欧米の有名校に劣らないほどハイレベルな教育機関へと押し上げた。ホフソンマーは、他のアジアの国々にあるアメリカン・スクールが、日本で彼が手がけたような改革を試みることに對してサポートを惜しまなかった。その目的の一環として、ホフソンマーは1922年12月北京と上海を訪れた。会議に出席し、講演をするなど多忙な滞在の疲労からか、12月22日夜、当地で急死する。42歳の若さであった。亡骸は東京に運ばれ、明治学院に程近い白金の瑞聖寺に埋葬されて、J. C. バラやワイコフら宣教師と共に眠っている。

本書で訳出した8通の書簡は、ホフソンマーが1912（大正1）年から1914（大正3）年に米国オランダ改革教会海外伝道局の月刊機関誌 *The Mission Field* に送付したものである。この2年間は、休暇で一時帰国する前の時期に該当する。書簡からは、ホフソンマーと明治学院生との深い交わりが生き生きと伝わってくる。

ホフソンマーは、英文学、歴史、修辭学など複数の授業を受け持っていたが、生徒たちとの交流は教室にとどまらず、しばしば一緒に遠足や小旅行に出かけていた。また、バイブル・クラスや日曜学校に生徒たちを誘い、伝道活動にも熱心であったことがわかる。

1919年のアメリカン・スクールへの突然の転職、そして、1922年の急逝により、これまでホフソンマーと明治学院との関わりは十分に明らかにされてこなかった。本書がその一助となれば、幸いである。

月刊機関誌 *The Mission Field* に掲載されている日本からの報告書簡は、ホフソンマーによるものが圧倒的に多い。だが、数は少ないが、米国オランダ改革教会海外伝道局が日本に派遣した他の宣教師からの書簡

も散見される。そして、それらには、明治学院や後に明治学院の兄弟校となる長崎の東山学院などの写真が添えられている。

本書の巻末に、それら写真を掲載する。大正期の明治学院とその周辺の様子を味わっていただきたい。

<参考文献>

The Christian Movement in Japan, Korea and Formosa : A Year Book of Christian Work, Twenty-first Annual Issue published by Federation of Christian Missions, Japan, 1923.

明治学院歴史資料館資料集第八集『朝鮮半島出身留学生から見た日本と明治学院』2011.

大正期の明治学院とその周辺

－ホフソンマー直教師の書簡より－

訳者解説（明治学院歴史資料館研究調査員・齋藤元子）

目次

明治学院とは	1
What the Meiji Gakuin Is	
日本 明治学院からの小旅行	8
Short Trips From Meiji Gakuin	
日本一明治学院からの小旅行 東京近郊にある哲学の庭	13
Japan Short Trips From Meiji Gakuin	
The Philosophical Garden Near Tokyo	
日本での日曜学校研修	20
Sunday School Training in Japan	
明治学院からの小旅行	26
Short Trips From Meiji Gakuin	
クリスチャン教師の影響力	32
A Christian Teacher's Influence	
日本でのクリスマスの催し	36
Christmas Entertainments in Japan	
なぜ君たちはバイブル・クラスに参加するのか？	40
クラスを受け持つホフソンマー教授からの問いに対する 生徒たちの応答	
Why Do You Come to this Bible Class ?	
Answers to This Question as Given by Students in Classes Conducted by Prof. W.E. Hoffsommer	
訳者注	45
写真	46

The Mission Field

Vol.25-5, September 1912

pp.165-167

What the Meiji Gakuin Is

From a Letter of Mr. W. E. Hoffsommer

明治学院とは

Mr. W. E. ホフソンマーからの手紙

明治学院とは一体どんな学校なのかと皆さん興味をお持ちであろう。よって、この手紙はそれについて書きたいと思う。明治学院は男子のための学校である。創設期には、3つの海外ミッションの支援を受けていた。3つのミッションとは、スコットランド一致長老教会・米国長老教会・米国オランダ改革教会である。現在は後者の2つのミッションが、日本人とともに、活動を続けている。

明治学院は3つの学部からなる。5年制の普通学部、これは概ねアメリカの2年制のグラマースクールと3年制のハイスクールに相当するものである。それから、3年制の高等学部と3年制の神学部である。現在3学部合わせて約350名の生徒、35名の日本人教員と講師、米国長老教会と米国オランダ改革教会それぞれ3名ずつの宣教師がいる。

私たち外国人宣教師による授業はほとんどすべて英語で行っている。普通学部では、私たち外国人宣教師は英語の授業のみを受け持っているが、高等学部では、他の教科も英語で教えている。例えば、私は次の学期に、歴史を3クラス、英文学を1クラス、修辞学を1クラス、英語で教える予定である。すべての科目で英語の教科書を使用する。日本で英語を学ぶことがいかに重要視されているかは、普通学部の教科の26パーセントが英語科目であるという事実からも十分に察することができる。

明治学院に関する権限は理事会に帰属している。この理事会は6名の外国人と6名の日本人から成る。理事会の代表は明治学院の3学部を統

率する総理である。教育部門においては、総理の下、一種のマネージャーであり寮の監督者でもある職員と教師たちがいる。教師陣はアメリカの大学の学部教師のような集団であるとの印象を私は抱いている。教師間における人種的な差別はない。各人が明治学院の教育に欠かせない存在として、いずれも際立っている。

学院の建物としては、チャペル、図書室をもつ神学部校舎、高等学部校舎、普通学部校舎、西洋的な設備が整っていない体育館がある。また、先ごろの火災で焼失してしまった寮、食堂、浴室を建設中である。それらの建物のうち2棟はレンガ造りである。すべての校舎は、海外ミッションと日本人の献金によって建てられており、その比率は海外が5で日本が1の割合である。敷地内には4棟の洋館と3棟の日本家屋があり、松と棕櫚しゅうろの木が植樹され、美しい景観を呈している。

明治学院は私学であるが、政府より部分的な承認を得ているので、生徒たちは卒業するまで徴兵の延期が認められている。また、卒業生は官立の上級学校への対等な進学が許されてもいる。それ故に、私たちは政府によって規定された科目をカリキュラムの中に取り入れなければならない。確かに、日本の学校の教科は多すぎる傾向にある。今年卒業を迎えたクラスは、19の異なる科目を履修した。彼らは一週間に40分間の授業を36コマも受講したのである。私たちの正直な気持ちとしては、文部省から完全に承認されることによって与えられる特権の獲得を目指すよりも、通常の授業において聖書を教えることに時間を費やしたいと思っている。

学内では、授業のほかに、様々な活動が展開されている。YMCA、文学ソサエティ、英会話ソサエティ、テニスや漕艇のサークル。半期に一度はウォーキング旅行も実施されている。つい最近までは野球クラブもあった。残念ながら、音楽系のクラブはまだない。合唱隊は結成されつつあるが。社会奉仕活動は、宣教師と生徒たちによって定期的に実施されており、数人の日本人教師も参加している。宣教師館では、毎週金曜日の夜、オープン・ハウスを開催している。毎回かなりの生徒がやってくる。ゲーム、音楽、会話を皆で楽しむのであるが、すべてに日本語と英語が入り混じっている。飲み物と軽食を供し、時には聖書の朗読や

祈祷を行うが、形式張ったものではなく、気軽な集会である。

日本のすべての学校がアメリカの学校と著しく異なっている点の一つは、軍事訓練が義務化されていることである。6歳で小学校に通い始めた瞬間から訓練は開始され、11年後に中等学校を卒業する時点では、武芸に熟達していることが求められている。日本の学校では、すべての教室において、朗唱の始まりと終わりに、級長が「注目」、「敬礼」と大声で叫ぶ。私が日本に来て最初に教室に入った瞬間の経験を今も忘れることができない。突然、教室の後方から「起立 (Kiritsu)」と叫ぶ大声が響き、すべての生徒が不意に私に顔を向け、「礼 (Rei)」と言って頭を下げた。困惑しつつも、私も頭を下げ返し、彼らはアメリカからやって来た新しい教師に特別な歓迎の意を表しているのであろうと推察した。教室の外で生徒は教師に会うと、必ず帽子をとってお辞儀をする。

このような学校でこのような職務に従事していることに私がやりがいを感じているか否かと、もし皆さんが問うのであれば、私は、躊躇なくきっぱりと、「イエス」と答える。私よりもはるかに優れた人々がこの仕事に命を捧げ、私よりもはるかに優れた人々が今現在この仕事に力を尽くしている。そして、私はこの仕事をまさに楽しんでいる。働きたいと望む家族全員がその機会を得るに十分な働き場がここにはある。一人の人間がこれ以上何を望もうか？ 知的かつ霊的な点においては、すべての結果が目に見えるものではない。時には、恩知らずや感謝の気持ちを表さない生徒に出会うこともある。だが、そのような経験が当てはまらない場所があるだろうか？ アメリカで若者を教育することに価値があるのならば、日本の若者を教育することも同様であり、むしろそれ以上の価値があろう。明治学院に入学を許された生徒は、1ヶ月に12円か15円の学費を支払わなければならない。これは6ドルか7ドルに相当する。皆さんの中に東洋の若者のためにこの金額を捧げたいと望む人がいたら、海外伝道局にぜひ送金をしてほしい。これ以上素晴らしい投資はないに違いない。

写真キャプション

THE SACRED BRIDGE AT NIKKO.

P.5 日光の神橋

この優美な橋は、日本の有名な将軍家の一つである徳川家の大霊廟へと至る入り口である。300年にわたり、この墓所は巡礼の目的地であり、崇拝の場所であった。明治学院のようなキリスト教学校は、日本古来の文明とキリスト教文明の間の隔たりを橋渡ししている。キリスト教文明は、日本が偉大な国家として存続するため獲得しなければならないものであり、日本国民を偽りの神々の崇拝から遠ざけ、人々の心を唯一の真なる神への純粋な崇拝へと導くものである。

What the Meiji Gakuin Is

From a Letter of Mr. W. E. Hoffsommer

YOU may have wondered just what sort of a school the Meiji Gakuin is, so in this letter I shall write of it. It is a school for boys that in the early days was supported from the foreign side by three missions—the Scottish Presbyterian, the American Presbyterian and the Dutch Reformed Missions. At present the last two, with the Japanese, are carrying on the work.

There are three departments: The Middle School of five years, corresponding in general to two years of grammar school and three years of high school in the States; the Upper Department of three years, and the Theological School

of three years. There are about 350 students, all told just now, with thirty-five Japanese teachers and lecturers on the pay roll, and six foreigners, three of each mission.

Almost all of the teaching done by us foreigners is in English. Our teaching in the Middle Department is the English language itself, but in the higher department, we foreigners use English to teach other branches. For instance, I shall have for the coming term three classes in history, one in English literature and one in rhetoric, using English text-books in all classes. The importance of the study of English in Japan may be seen from the fact that twenty-



Sacred Bridge, Nikko.

橋神光日

THE SACRED BRIDGE AT NIKKO.

This graceful bridge is the approach to the Mausoleum of Tokugawa, one of Japan's famous Shoguns. For three hundred years the tomb has been an object of pilgrimage and a place of worship. Such Christian schools as the Meiji Gakuin are bridging the chasm between the old civilization of Japan and the Christian civilization she must attain if she is to remain a great nation, and are leading her people away from the worship of false gods and human spirits to the pure worship of the one and true God.

six per cent of the courses in the Middle School are English courses.

The authority of the school is vested in a board of trustees, consisting of six foreigners and six Japanese. The president of this board is president of all the departments of the school. Under him in the academic department is an officer who is a sort of manager and dormitory inspector. Then there is the faculty, much like faculties at home, I judge. There is no race distinction among faculty members; each one stands out pretty much for what he is worth.

In buildings, we have a chapel, a theological department with library, an upper department building, a middle school building, a gymnasium unfurnished with western appliances, and, in process of erection, a dormitory, eating hall, and bath house, to take the place of those recently destroyed by fire. Two of these buildings are of brick. All the buildings, speaking generally, have been put up by foreign and Japanese money, the proportion of payments being about five dollars of foreign money to one dollar of Japanese money. There are four foreign and three Japanese houses on the compound which presents a fine appearance in its setting of pines and palms.

We are a private school given partial recognition by the government, and so granted postponement of conscription of our students until after their graduation, and our graduates can try on equal terms with anyone for entrance into the higher government schools. Consequently we must do a prescribed work in the curriculum. The student class in Japan is certainly overworked; the graduating class of this year had nineteen different subjects; they had thirty-six periods of forty minutes per week. We feel that we would rather teach the Bible in regular course, as we do, than obtain such privileges as would be ours were we in full recognition by the department of education.

There are other activities in the school besides lessons, and Meiji Gakuin has its Young Men's Christian Association,

Literary Society, English Speaking Society, tennis, rowing, semi-annual walking trip, and up until recently, its baseball club. However, it lacks music clubs, though a chorus is usually in the making. Social work is done with the students from the foreign end of the faculty in quite a consistent manner, and also by some of the Japanese teachers. At our home, we keep open house every Friday evening with a pretty steady lot of fellows who come. Games—some native and some foreign; music of both sorts, too; conversation, mixed also, and light refreshments, with sometimes Bible reading or prayer, make up the informal set of doings.

One thing which distinguishes all schools in Japan from those in the United States of America is the compulsory military drill. From the moment that a student enters school at six until he graduates from the Middle School eleven years later he is being perfected in the military art. In all schools in the class room at the opening and the closing of the recitation the class leader calls, "Attention," "Salute." I remember when I entered my first class. Suddenly from the rear of the room I heard the stentorian "Kiritsu" and suddenly every student faced me, and then on "Rei" they bowed. Confusedly I bowed in return, and supposed that they were giving the new teacher from America a special reception. Outside of the class room the student always removes his hat in bowing to the teacher.

If you ask me whether I think it is worth my while to put my life in such a school and in such a work, I answer, decidedly and unhesitatingly, yes. Much better men than I have died in this service and much better men than I are living in it. And I enjoy the work. There are as many opportunities for service as a whole family could wish for, and what more does a man want? All the results in an intellectual and spiritual way are not visible and sometimes ingratitude or unappreciative students are met with, but where is that not the case? If it is worth while to teach youth in America,

it is just as much worth while in Japan, and more so. A student can get through Meiji Gakuin, all expenses paid, for Yen 12.00 or 15.00 per month. That is, \$8.00

or \$7.50. If you want to put this amount in young manhood in the East send it to our Board of Foreign Missions. A better investment could not be made.

The Mission Field

Vol.26-3, July 1913

pp.114-115

Japan

Short Trips From Meiji Gakuin

By Mr. W. E. Hoffsommer

日本 明治学院からの小旅行

Mr. W. E. ホフソンマー

宣教師は必ずしもシネマトグラフの熱心な愛好家ではないので、私たちをその分野の権威者の範疇に入れることはできないが、私は何回か上映会に足を運んでいる。時には、もっと真面目なことに取り組んでいる友人の作業を中断させ、どんな作品が上映されているかを調べる作業に誘い込むことに楽しみさえ感じている。まさに最近では、私が担当している歴史クラスの一組と一緒に、ジョン・バニヤンの『天路歷程』を観に行くことまでしている。これはイタリアのフィルムである。主人公クリスチャン役の俳優は、以前観た工場ストライキをテーマとする作品のヒーローとして出演していた。また、後にはミルトンの『失樂園』で悪魔を演じていた。

上映会の映像の約半数は海外のものである。実際、時折「すべて西洋のもの」と特別に宣伝されていることもある。純粋に日本のものはまだ知らない。ただし、日本の演劇を映し出した1時間ほどの作品を観賞したことはある。これは26の場面から構成されていたが、劇場の至るところからすすり泣きが聞こえてくるほど、リアリティがあった。

上映会が催される建物は、建築様式の点において、かなり西洋的である。一部の場所では、上映は午前10時半に始まり、24時間続くのである！ どの会場も2セント半から25セントの入場料を支払った人たちで満杯である。喫煙、食事、ソフトドリンクは許可されている。よって、室内の空気がどれほど不快なものであるか想像できるであろう。上映の

合間には、ウェイトレスが通路を回って、菓子やオレンジやちっぽけな土産物売り歩く。そして、夜の9時半ごろには、明かりが点されている間、人々のギャギャと話す声は、案内係の女性の金切り声に断続的にかき消される。彼女は、アメリカ風に言えば、次のような内容のことを叫んでいるのである。「デリー通り 223 番地のウィリー・ジョーンズさんはいらっしゃいますか？ 入り口でお母さんがお待ちです」。

使用されている機材は、友人の言葉を借りると、「役立たず」である。欧米で散々上映されて劣化したフィルムを更なる使用のために日本に送ってきたと十分に想像できる。そのような質の悪いフィルムを観続けることは目をいためる結果となる。すでに日本ではかなりの数の目の不自由な人たちが、特別な技能を有するマッサージのスペシャリストとして街中を歩いているのを見かける。劣悪なフィルムの鑑賞は、そのようなスペシャリストを増加させることにつながるであろう。

上記のような事情ゆえに、皆さんが今アメリカで観ているものを、私たちが遅かれ早かれきっと観ることができるであろう。日本には検閲制度といったものは存在しないが、フィルムの中に何らかの好ましくないものが見出されれば、警察によって上映が禁じられる。

今日はとても興味深い出来事があった。それは明治学院の卒業生の一人が私を訪ねてきてくれたことに始まる。彼は、入学から卒業までの5年間を私が連続して教えた最初のクラスの一人であった。それ故に、このクラスの面々は私にとって特別であり、とりわけ興味を覚えるようになっていた。お茶をすすりながらしばらく雑談をした後、彼は私にこう言った。「大きな1枚の紙に主イエス・キリストの金言を記していただけませんか？ 私はそれを自分の部屋に張り、その言葉を実践したいと思います」。私はしばし考えてから、次のように記した。「イエスはその人に、“鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない”と言われた。(ルカによる福音書9:62)」。

彼は私の名前も紙面に書くよう主張した。なぜならば、将来自分が死を迎えた際、これを子どもに託したいと思っているからであると彼は語った。

生徒の中には記念となる何かを盛んに欲しがる者がいる。モット博士¹とエディ氏が東京の生徒たちに講演をした折、明治学院の生徒の一人は、二度も三度も講演者二人のサインをもらって欲しいと半ば強要するように私に懇願した。また、他の数人が試みた別の方法は、各人が自らの讚美歌集を取り出し、最も好んで歌う讚美歌の頁を開いて、著名な人物にも私たちのような著名でない人物にも皆その頁にサインをしてもらうという方法である。こちらのほうがむしろより賢い方法であろう。

写真キャプション

STREET IN KARUIZAWA – JAPAN’S MISSIONARY SUMMER RESORT
P.11 軽井沢の町並み——日本で活動する宣教師たちの夏の避暑地

Japan

Short Trips From Meiji Gakuin

By MR. W. E. HOFFSOMMER



MISSIONARIES are not exactly devotees of the cinematograph show, and so we cannot be classed as authorities on that subject, but I have been to a few and have

also had the pleasure of inveigling my friends occasionally to drop their more serious work and see what is "on." Indeed, I even went so far not long ago as to go with one of my history classes to see Bunyan's Pilgrim Progress. This was an Italian film. I had seen "Christian" some time previously as the hero in a certain industrial strike, and I saw him later as Satan in Milton's Paradise Lost.

About half of the pictures shown are foreign. Indeed there are occasions when it is advertised as a specialty that *all* will be western. I know of none which are purely Japanese, though I have sat for an hour straight as twenty-six parts of a

Japanese play were thrown upon the screen realistically enough to draw snuffles from different parts of the house.

The buildings used are quite western in style. In some, the thing begins at ten-thirty A. M., and continues for twelve hours! The houses are usually packed at prices ranging from two and a half cents to twenty-five cents. Smoking and eating and drinking soft drinks are permitted, so you can imagine what the air is like. Between films waitresses go through the aisles selling cakes, oranges, knick-knacks and trivialities. And about half past nine at night while the lights are on the hum of conversation is repeatedly broken by the shrill voice of some female usher with a cry like the following: "Is Willie Jones, of 223 Derry Street, in the house? His mother is waiting for him at the door."

The machines used, to quote my friend, are "bum." After the films have been worn out, one would think, in the West, they are sent to Japan for further use.



STREET IN KARUZAWA—JAPAN'S MISSIONARY SUMMER RESORT

They are calculated to add to the already large number of blind persons strolling the streets as lay professors of the art of massage.

So what you see at home we are sure to get sooner or later. There is no regular censorship here but if something is found to be objectionable it is prohibited by the police.

There was a very interesting thing occurred to-day when one of our Meiji Gakuin graduates called to see me. He was a member of the first class that I have taught right through from the beginning to the fifth year, so I had become intensely interested in this particular group of fellows. After we had talked a while and were sipping our everlasting tea, he said to me: "I wish you would write on a large sheet of paper some maxim from

Jesus so that I may paste it up in my room and follow it." After some thought I wrote:

No man, having put his hand to the plow, and looking back, is fit for the kingdom of God.—Jesus.—Luke, 9:62.

He insisted that I write my name, for he said that when he was so unfortunate as to die he would hand it on to his children.

Some students are very earnest in getting memorials. Dr. Mott and Mr. Eddy spoke to students in Tokyo, and one of the Meiji Gakuin boys asked me two or three times almost insisting that I get the autograph of these men for him. Another way some have is to get famous men and some of us who are not famous to write our names in their hymn books at the hymn we like best. I think this rather a clever idea.

The Mission Field

Vol.26-6, October 1913

pp.211-213

Japan — Short Trips From Meiji Gakuin The Philosophical Garden Near Tokyo

By Mr. W. E. Hoffsommer

日本 — 明治学院からの小旅行 東京近郊にある哲学の庭

Mr. W. E. ホフソンマー

最近、明治学院の上級クラスの生徒3人から、土曜日の午後、近距離の遠足に連れて行って欲しいとの要望があった。彼らの話では、数マイル郊外に、ありとあらゆる種類の霊物やお化けを見られる場所がある。そこには、人間の精神の奇妙で薄気味悪い姿が、鑑賞を目的として、並べられているそうである。私は彼らと一緒にそこを訪れた。そこで目にしたのは、私がこれまで全く見たことのないものであった。

何か楽しいことが待ち受けていると期待して訪れた場所であったのだが、その予想とは異なっていた。私はこの場所の創設者に会ったことがないので、なぜこのような方法を用いて彼の哲学的な思想を具現化したのか、その目的を彼自身の言葉を引いて説明することはできない。しかし、ここを訪れたことのある数人から得た情報によると、そのコンセプトは、井上円了²教授が古い大名の地所であった庭園を修養の場とし、ここにおいて、哲学的に彼に傾倒した人たちが自らの精神の素養を高め、絶えず哲学的な考えを思い巡らそうとしたのである。おそらく、アテネの郊外にあった古代のプラトンによるアカデミヤやアリストテレスによるライシエームの日本版を創設しようと試みたのであろう。

哲学堂とそれに付随する建物や展示館は、その大半が低い丘の上に位置し、そこからいわゆる「八景」が眺望できる。案内チラシによれば、本来ならば、来訪者は「哲理」の門から入ることが求められている。この門は、一般には「悪魔門」として知られている。だが、多くの日本の

門と同様、この門は、ほとんどの時間帯、閉まっている。よって、来訪者は、「常識門」と呼ばれているあまり見栄えのしない門から出入りすることで満足せざるを得ないのである。

入園の際、「ゲストブックに氏名と住所等をお書きください。もし管理人にご用の場合は呼び鈴を鳴らしてください」との注意書きが目に入る。「管理人がお茶を供しても、その代金は無用です」とのサインは、心地よい。しかし、お茶のもてなしを受ける前に、この場所全体の名称となっているホールあるいは寺院を見るべきである。

向こうに見える 24 フィート四方の建物が「寺院」であると言われたならば、私がそのような仰々しい名称を使ったことに皆さんは確実に驚くであろう。入り口の扉は土日と祭日にのみ開かれ、このことが俗世との隔たり感を生んでいる。床には通常の畳以外は何も置かれてない。しかし、天井の真ん中とそこから吊り下げられているものには目を奪われる。天井からは 4 本の柱が延びており、天蓋を作っている。天蓋とは、仏教寺院において、常に主要な仏像と神聖な場所を覆うものである。これら 4 本の柱は、天蓋を支える重要な基点を形成している。天蓋の金箔と銀のガラスは、宇宙の起源の不明瞭な状態を指し示している。柱からは赤色ガラスで作られた球状のランタンが吊り下げられている。これは精神の源を象徴している。その下には、光沢のない四角形の香料の壺が掛けられている。これは肉体の源を表現している。この 2 つのものは、宇宙の永遠の問題に由来している。天井の中心から放射状に伸びている円形の棒は、屋根を支えるための建築上の必要性のみならず、共通の起源から生み出される様々な形態を示している。仏教学的に言えば、上述したもののすべてが統一された形態こそが主要な仏像であり、哲学的に言えば、さて、皆さんなりの考えがたぶんあるだろう。

井上博士は、古代と近代ならびに西洋と東洋の哲学を崇めるために、インドの釈迦、中国の孔子、ソクラテス、カントを選んだ（説明書きによれば、ここは、宗教ではなく、哲学の会堂であるので、主イエス・キリストは選ばれていない）。ところで、これら 4 人の哲人の名前は、天蓋の四隅にある大きな銘板に記されており、この建物は「四聖堂」という特別な名称が冠されている。

上述した「四聖堂」が世界的に知られた4哲人を祀っているように、「六賢台」もインド、中国、日本の各2名の哲人³を祀り、彼らの肖像画を最上階に配置した建物となっている。この6人の哲人を拝礼する際、彼らを呼び出すために鈴が設置され、二度の間隔をあけて6回鳴らすように指示がある。これは近隣の農家が火災警報と勘違いしないための配慮である。このタワーの重要な部分を見物し終わると、参詣者（もしそのように呼べるのであれば）は、参詣のプロセスの他の部分へと向かう。それはむしろ娯楽的な側面への移行である。この特異な場所は、日本と外国双方から収集した夥しい雑多な珍品で成り立っている。例えば、日本の鉄道駅から集めた茶碗、世界各地の愛煙家が使用したパイプ、様々な寺院のお守り、絵葉書、着物などである。しかし、ここで長く時間を費やしてばかりはられない。

小高い丘の上には、仏教・儒教・神道の三宗教を象徴する三角形のパビリオンがある。掲載した日本の三大宗教の門弟の写真は、木に彫刻されたものである。

今、ある意味において、もっとも興味深い場所に到達した。それは唯心論と唯物論の庭である。5～6エーカーの広さがあり、哲学的な思想を表記した石碑が点在している。それらが立てられている場所の名称を歩いた順に示そう。

皇国殿・一元牆^{しょう}・鬼神窟・無尽蔵・時空岡・宇宙館・幽霊梅
相対溪・理想橋・絶対城・聖哲碑・意識駅・直覚径・認識路
論理域・唯心庭・心字池・概念橋・主観亭・倫理淵・理性島^く
先天泉・心理崖・独断峡・数理江・百科叢・懷疑巷・二元衝
造化澗^{たに}・神秘洞・後天沼・原子橋・博物隄^{つつみ}・理化潭^{たん}・客観蘆
唯物園・進化溝・万有林・感覚巒^{らん}・経験坂・天狗松・霊明閣
髑髏庵^{どくろ}・常識門

しかし、「常識門」（私たちは今や「常識」が少し必要かもしれない。このセンスなくしては、他のすべてのセンスはナンセンスである）から退出する前に、「髑髏庵」の表玄関をくぐることが許された。そこは髑

體が来園者に火と死への気付きを促す場である（東京の人は火と死を同じように発音する）。私たちはビリケン像を背に正座した。ビリケンは「アメリカの幸福の神」と日本では言われている。哲学的な絵が施された碗で茶をすすりながら、髑髏の上に坐しているヒキガエルの置物が何を満足げにながめているのだろうか、あるいは幽霊が今にも消え失せそうな手で立派な楓製の杖をどのように使いこなしているのだろうかなどと思いを巡らした。茶を飲みながら寛ぐうちに、アライグマ、キツネ、ウサギのはく製やビリケンのような偶像が飾られているという不快感を忘れることができた。そして、次回はランチやチェスを持参し、素敵な藁ぶき屋根の「客観蘆」で午後を過ごし、太陽が日没の光を「万有林」を通して私たちに投げかけてくるまで滞在しようという計画さえ立てていた。

写真キャプション

IMAGE OF A SPRITE IN THE PHILOSOPHICAL GARDEN

P.18：左 哲学の庭にある霊物の像

WOODEN GHOST IN THE PHILOSOPHICAL GARDEN

P.18：右 哲学の庭にある木彫りの幽霊

Japan---Short Trips From Meiji Gakuin

The Philosophical Garden Near Tokyo

BY MR. W. E. HOFFSOMMER



NOT long ago three of the students of the Upper Department of the Meiji Gakuin asked me to take a little jaunt with them of a Saturday afternoon. They told me

that there was a place out in the country a few miles where all sorts of sprites and hobgoblins were, and that the strange and uncanny features of the human mind were there lined up for inspection. I went with them and found something different from anything that I have ever seen.

I have not met the founder of the place—that pleasure awaits me, I hope—and so I cannot speak words from his own mouth as to the purpose in materializing his philosophic ideas just in the way he has done, but the conception I gather now from several visits there is that Prof. Inoue Enryo has tried to create a retreat in the garden of an old daimyo's estate where men philosophically inclined may advance their spiritual culture and be reminded continually of philosophical ideas. Perhaps it is an attempt to Japonicise the Ancient Academy or Lyceum outside the city of Athens.

The philosophical hall and the accompanying buildings and pavilions are situated for the most part on a low hill from which eight so-called "views" can be seen. According to the descriptive circular one is supposed to enter by the gate of "Theory of Philosophy," the popular name being "Gate of Demons," but like many main gates in Japan it is for the most part shut, and the visitor must be content to both enter and depart by the rather insignificant entrance called the "Common Sense Gate."

Upon entering you will see a notice telling you to write your name and ad-

dress and anything else you please in the guest book; if you wish the caretaker, ring the bell; it is gratifying to notice a sign telling you not to pay her anything for the tea she brings you. But before taking tea—or much—we had better see the hall or temple which gives the name to the whole place.

You will be surprised, I am sure, after I have used such high sounding names for it, to be told that the square building yonder twenty-four feet each way is the "temple." The door is opened only on Saturdays, Sundays, and holidays—this makes it less vulgar. The floor has nothing on it but the regular mats, but in the centre of the ceiling and suspended from it are the things which attract attention. Four posts extend from the ceiling and make the canopy which always covers the main image and holy of holies in a Buddhist temple. These four posts are the forms of the cardinal points upholding the heavens. Gilt and silver glass in the canopy indicate the original nebulous state of the universe. From these posts is suspended a red glass spherical lantern to represent the source of mind; below this hangs an opaque square incense pot to express the physical source. These two have been derived from the eternal matter of the universe. Round sticks radiating from the center of the ceiling serve not only the architectural necessity of supporting the roof but also indicate the manifold forms produced from a common source. Speaking Buddhistically, these things taken together are the main image; speaking philosophically, well, you probably have the idea.

So that one may bow down before the ancient and modern, the eastern and western philosophies, Dr. Inoue has chosen Shake (Buddha) for India, Koshi



IMAGE OF A SPRITE IN THE PHILOSOPHICAL GARDEN



WOODEN GHOST IN THE PHILOSOPHICAL GARDEN

(Confucius) for China, Socrates and Kant. (A parenthetical note says that Jesus Christ is not chosen because this hall is a philosophic one and not religious.) The names of these sages, by the way, are on large tablets on the four sides of the canopy, and the particular name of this building is "The Hall of the Four Sages."

As the above mentioned four sages are universal, a "Six Wise Men Tower" has been constructed and up at the top the paintings of two each from India, China and Japan are arranged. A bell is there to call them out when you do obeisance. You are instructed to strike it six times at intervals of two so that the surrounding farmers may not think there is a fire alarm. Having finished the

serious part of this tower, the worshipper, if I may call him such, turns to the other part of the process of "going up to the temple to pray." That is the amusement side. In this particular place it consists of quite a vast and heterogeneous collection of curiosities both native and foreign. For example, there are collections of tea cups from the railways stations of Japan, pipes from the smokers of many nations, amulets from various temples, post cards and clothes. But we cannot stop here too long.

Up a little hill and we are under the triangular pavilion of the three religions, Buddhism, Confucianism and Shintoism.

The photos of three great Japanese religious scholars are here carved in wood.

Now comes what in a certain sense

is the most interesting of all—the gardens of spiritualism and materialism, some five or six acres in extent, and the stone posts indicating philosophical ideas. Here they are in their order:

Study house.
Fence of Monism.
Cave of devils.
Inexhaustible treasury.
Mound of time and space.
Hall of the universe.
Ghost plum tree.
Valley of relativity.
Ideal bridge.
Absolute province.
Monument of sage and saint.
Station of consciousness.
Intuition path.
Way of cognition.
Barrier of logic.
Pond in the form of the ideograph for "mind."
Bridge of general concept.
Subjective pavilion.
Pool of ethics.
Island of reason.
Apriori Spring.
Psychology precipice.
Gulley of dogmatism.
Harbor of scientific learning.
Encyclopaedic thicket.
Street of skepticism.
Dualism road.
Valley of creation.
Mystery cave.
Aposteriori swamp.
Atomic bridge.

Natural history dyke.
Pond of derived theory.
Objective hermitage.
Garden formed like the ideograph for "matter."
Evolutional drain.
Forest of the universe.
Hill of sensation.
Experience hill, Bragging pine.
Universal hall.
Skull's hermitage.
The gate of commonsense.

But before we go out of that "Common Sense Gate" (we may need a bit now of that "sense without which all other sense is nonsense") let us go through the portal over which a skull tells us to beware both of fire and of death (the Tokyo word for both is the same), let us sit down and with our *backs* to Billiken, the "American god of Happiness," as he is labelled in Japan, sip a cup of tea out of these philosophic tea cups and conjure what the toad sitting over there on that skull might be gloating over, or how yonder ghost could even use that ghost came of good maple with those hands fast fading into nothingness. While the tea soothes us let us forget the terrible badgers and foxes lined up with that rabbit's foot and Billiken and plan to come with a lunch and our chess men and spend a pleasant afternoon down in that lovely thatch roofed "Hermitage of Objectivity" until the sun sends his setting rays upon us through the "Forest of the Universe."

The Mission Field

Vol.26-10, February 1914

pp.360-363

Sunday School Training in Japan

By Mr. W. E. Hoffsommer

日本での日曜学校研修

Mr. W. E. ホフソンマー

この島国において、東京はあらゆる物事を中心である。西欧の国々の首都は必ずしもそうではない。日曜学校の活動に関しても、それは事実である。

東京では、ほぼすべての宣教師が日曜学校に直接関与している。東京以外で活動する宣教師も同様のことが言える。しかしながら、日曜学校の数は東京が他の地域を圧倒している。その訳は、東京には多くの教育機関があり、その存在が日曜学校運動に刺激を与えているからである。この刺激を他の場所で得ることは困難である。外国人である宣教師たちによって、優れた西欧の教授法を取り入れながら、着実に首尾一貫した聖書教育が実施されている。

たが、勿論、宣教師たちの働きは、成し遂げられたことのごく一部に過ぎない。大勢の日本人教師たちが日曜学校活動の前面に立っているのであり、まさに彼らの努力に報いるために、私たちは若者を信仰に導くという成果を求めなければならない。

それゆえ、今年の秋、私が芝教会の日曜学校教師たちに講演をする機会を得たことは、大変興味深い体験であった。芝教会で、これまで私は6年間、高校生と大学生の若者に英語を教えてきた。私は、ある意味、この英語クラスを卒業しており、ミスター・ヴァン・ストレイン (Van Strien)⁴ が引き継いでいる。日曜学校教師のための修養クラスは日本語で行われる。

修養クラスは、午後の12時半という珍しい時間帯に始まる。しかし、

これには理由がある。日曜学校は朝の8時半に始まる。それから10時からの礼拝に参加する。そして、12時には、クラスに参加するものは教会の後方にある小部屋に集まり、米飯の昼食をともに取る。それから、12時半になると、上の階にある小部屋——建物のほかの部分からかなり隔たっている真に塔のような部屋——に移動し、クラスを開始する。私はこのクラスにやって来た人たちが示した関心に驚いた。アメリカでも、他のどこの場所でも、そこに集えなかった人たちは常に私たちと共にいるということに対してである。それは奇妙なことであろうが、真実であり、正に逆説である。

この国での授業風景を視察した者が先ず印象づけられることは、ソクラテス・メソッド⁵がほとんど採用されていないという事実である。教師による講義、講義、講義の連続である。それ故に、生徒たちの潜在的な能力を引き出すという難しい技を、教訓や実例を用いて教授せねばならず、さらにこのクラスにやって来た8～10人の教師たちにそのやり方を示さなければならないのは、非常に難題である。

東京では日曜学校のエリアを4区域に分け、年に数回、教育や研修のミーティングを催している。芝教会と明治学院が立地する区域では、非常に興味深いミーティングを1、2週間前に開催した。しばしば、彼らは教育学的な主題の講演会を持ち、その折には、大体25名の出席者がある。しかし、この1、2週間前のミーティングでは、73名の出席者を誇る結果となった。その日は本来の日曜学校も開かれていたので、大人たちは、私たち宣教師と一緒に、あたかも幼い子どものように時折振舞ったり、また成人に戻ったりした。

5名の日曜学校教師が演劇を披露したが、その中の3名は明治学院の生徒であった。その内容は、生徒たちが毎週日曜日に実施している活動についてであり、とても良い話であった。幼稚園クラスの先生に扮した女性は、この季節ならではの言葉を発した。彼女は「さて、今日ここで皆さんにお会いできて、本当に嬉しいです。今日はじつに寒いですね。皆さんの中には風邪を引いている方もいらっしゃるようで、鼻水をすする音があちこちから聞こえてきます。そこで提案ですが、皆さん今からハンカチを出し、一緒に思い切り鼻をかみましょう。そうすれば、静け

さの中で残りの話に集中することができます。と言うのは、今日は皆さんにとっても大切なお話をしたいからです。よろしいですか？ さあ、一斉に鼻をかんで！」と呼びかけた。そして、私たちは鼻をかんだ。その後は、少なくとも大人たちの中で、鼻水をすすった者がいただろうか？ いや、誰もいなかった。

もう一つ私たちを笑わせたことは、一人の少女が発した言葉である。彼女の父親は、東京にある組合派教会のリーダー的存在の牧師である。ヨセフについて学んでいた時、「ヤコブには何人の息子がいましたか？」という問いが出された際、彼女は挙手して指名を要求し、「1 (Ichi) ダースです」と答えた。これは英語の「1 (one) ダース」をうまく用いた日本語である。このように日本語と英語を結びつけた日本語表現は、非常に笑いを誘うものである。

授業の後、反省会の予定であったが、時間が押してしまい、ティータイムとなってしまった。それ故に、反省会は先送りとなった。私たちの何人かは反省会を楽しみにしていたのだが……。しかし、私のクラスでは、翌週の授業の後、お茶と軽食を取りながら、無事反省会をした。

写真キャプション

SUNDAY SCHOOL CONVENTION, TOKYO.

P.23 東京での日曜学校大会

JAPANESE SUNDAY SCHOOL LEADERS.

P.24 日曜学校の日本人指導者たち——第四回日本日曜学校協会大会

THE RAW MATERIAL FOR THE SUNDAY SCHOOL.

P.25 日曜学校の宝である子どもたち

Sunday School Training in Japan

BY MR. W. E. HOFFSOMMER



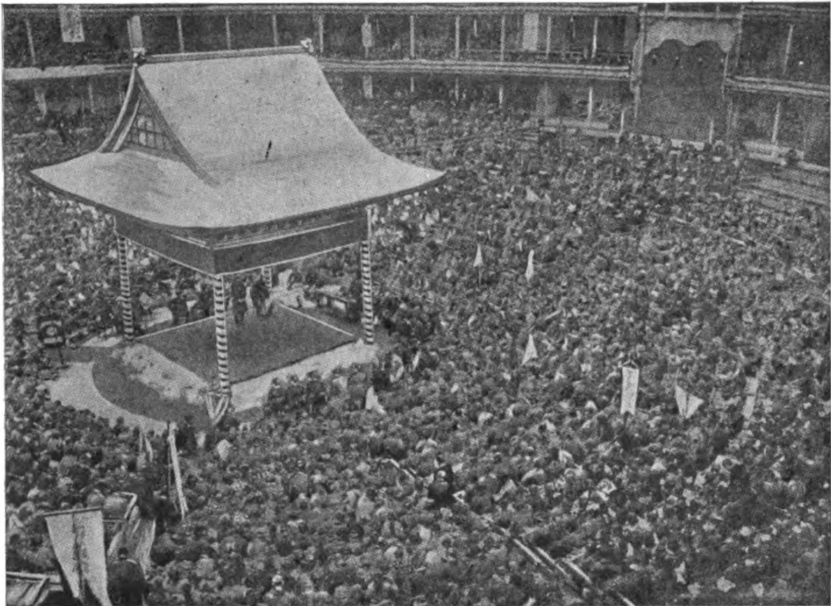
OKYO is the center of all things in this land in a way that the capitals of the West are not. This is true of the progress in the Sunday School work as in nearly everything else.

Nearly every missionary in the city is directly connected with a Sunday School. This is pretty true of those in the country as well, but the great number that are concentrated here on account of the large number of educational institutions gives the movement of Sunday Schools an impetus that is hard to get in any other

place. The Bible is being taught by these foreigners steadily and consistently and in harmony with the best pedagogical methods of the West.

But, of course, the work done by the missionaries is but a small part of that actually accomplished. The great army of Japanese teachers bear the brunt of the work, and it is to them that we must look for the conquest.

So it was with a great deal of interest that I took the opportunity presented this fall to teach the teachers of the Shiba Church—where I had been teaching an English class of high school and college boys for the last six years. I have in a



SUNDAY SCHOOL CONVENTION, TOKYO.



JAPANESE SUNDAY SCHOOL LEADERS.

sense graduated from this English class, and Mr. Van Strien has taken up this work. The work in the training class is in Japanese.

We meet at the unheard-of hour of twelve-thirty noon for the lesson. But there is a reason. Sunday School is at eight-thirty in the morning; then comes the preaching service at ten. At twelve those that are going to stay for the class sit down together in the little room at the rear of the church, and there we have our rice together. Then at twelve-thirty we all go up in "the little upper room"—really a tower room quite separated from the rest of the building—and there we have our class. I am surprised at the interest that has been taken in this class by those who have come. Like America or any other place, those who do not come are always present with us. Strange, but true, paradox that it is.

The first thing that strikes an observer of the teaching in this country is the fact that the Socratic method is seldom used. It is lecture, lecture, lecture. So the about twenty-five. But this meeting boasted an attendance of seventy-three

and for the reason that a real Sunday School was held—as far as it could be, with us big people acting from time to time as if we were little tots and grown-ups, too.

Five teachers performed, and three of these were Meiji Gakuin students—something that speaks well for the work that our undergraduates are doing on Sundays. The woman who impersonated a problem is to teach by precept and example the difficult art of drawing out of the student, and showing the eight or ten teachers who come to the class how to do this.

There are four Sunday School divisions in this city, and they have educational and training meetings several times a year. The last one in the division in which the Shiba Church and also Meiji Gakuin is situated had a very interesting meeting a week or two ago. Often they have lectures on pedagogical subjects, and at those times the attendance has been teacher of children of kindergarten grade said a very seasonable thing. She said: "Now, I am glad to see you all here today, for it is pretty cold, isn't it? I see



THE RAW MATERIAL FOR THE SUNDAY SCHOOL.

that some of you have colds and are making noises with your noses. So I think that we had all better take out our handkerchiefs and all take a good blow together, and then be quiet for the remainder of the lesson, for I have something very important to tell you to-day. Ready, all together, blow!" And then we blew. And who (of us big ones, at least) would dare to snifle after that?

Another thing that made us all laugh was said by a daughter of one of the leading Congregational pastors in the city. The lesson taken was the story of Joseph,

and the question asked was, "How many sons had Jacob?" She raised her hand and, being called upon to answer, replied, "Ichi doz." Which is the Englishified for the convenient "one doz.," and in such a connection very amusing in the Japanese language.

The intention was that after the teaching there was to be criticism, but the hour became late by the time that we had tea, and so that pleasure—for some of us—had to be foregone. However, my class had their say about the teaching the following week over our teacups and rice.

The Mission Field

Vol.26-12, April 1914

pp.449-451

Short Trips From Meiji Gakuin

By W. E. Hoffsummer

明治学院からの小旅行

W. E. ホフソンマー

伊豆という伝道地の光景

今から約 50 年前、キリスト教を禁止する禁教令の札は、依然取り払われていなかった。しかし、諸外国の外交的圧力が功を奏して、違反者に対する刑の執行は、以前に比べて、かなり軽減していた。その当時、バラ博士⁶の伊豆の地における伝道活動は、セリザワ・サイベイ (Serizawa Saibei)⁷の改宗という形をとって、最初の報いを得ていた。私はこの二人の男性を実にやる気に満ち溢れた老人として現在知っている。彼らのエネルギーは、私たち世代の多くが十分に力を発揮していないような恥ずかしさを覚えるほどである。私は彼らと一緒に天城峠を越えた。一人は 69 歳で、もう一人は 79 歳の誕生日に峠越えという正に「離れ業」を成し遂げたのである。もし私がこの足の速いグループの一員でなかったとしても、この離れ業のことを都会で暮らす友人たちに自慢していたであろう。さて、この段落における重要な点は、以下の事実である。この二人の男性は、昔この地域で夜半に路傍伝道をしたということである。彼らは持参した手提げランプを政府が掲げた高札の一つに吊り下げた。この高札は、流行病を蔓延させる邪悪な宗教であるキリスト教の禁止を布告するものであった。彼らはその夜、その場において、その邪悪とされたキリスト教を広めようとした。もちろん、彼らは投石を受けた。しかし、その中から、一人の改宗者が誕生したのである。

クリハラ — 視力の弱い友と共に

教育活動に従事している宣教師は、学校のスケジュールの中から自由時間が得られた際、地方伝道に赴かなければならない。今回はクリスマス休暇で、地方というものを私に実体験させてくれる旅であった。同伴者は、福音伝道が生み出したプリンスの一人と呼べるクリハラという名の男性で、伊豆の柏久保在住の私たちの仲間である。彼は15年間当地で教師をしていた。最後の3年間、彼はウハラという名の農夫に悩まされ続けていた。ウハラはある頑固な考えを抱いていた。その考えとは、クリハラはクリスチャンになるべきであるというものである。そのために、ウハラは3年間、毎日曜日クリハラを追い掛け回し、この地域の少数のクリスチャンが開催している小さな集会に誘った。ついに、クリハラは集会に顔を出した。そして、その行為はクリハラという一人の男性の人生ならびに彼の3人の子どもたちの人生に変革をもたらした。ウハラはクリハラをキリスト教に導いたのである。この当時のキリスト教迫害者は、二人の名前が近似していることに注目し、それをうまく迫害に利用できないかと早々に思案した。

人間や国家の精神的な再生の歴史において、カメラは多くの興味深い事実を映し出している。だが、他のいかなる場所よりも、誰かの記憶の中に、常に多くの光景は残っていくであろう。そして、そのような光景の一つを私はここで紹介したい。農夫であるウハラの家の茅葺屋根が背景に見える。もし、あなたが25ヤード離れた道路上に立っていたならば、4人の男性の姿が目にとまるであろう。3人は座し、甘くておいしそうな干し柿をちょうど食べ終わろうとしているところである。立っているのは年配のウハラで、彼が庭の隅に近い竿から干し柿を取って皆に供したのである。そして、もちろん、茶の用意もある。座っているのは、宣教師、彼の旅仲間の福音伝道師、そしてクリハラである。奨励の言葉が提案されている。クリハラが先導役となり、よく使い込まれた聖書を開く。そして、信仰における彼の年老いた父親であるウハラの傍らに立ち、ウハラのために改めて聖書を広げる。クリハラは極度の近眼であったため、紙面から1インチ以上目を離すことができず、頭を頻繁に上下させながら、聖書の言葉を追いつける。彼はフィリピの信徒への手紙第

1章「わたしの身によってキリストが公然とあがめられるように…わたしにとって、生きるとはキリストであり」⁸を読んでいる際、何度か途中で言葉を切り、手を掲げて次の言葉を強調する。私はウハラの目に涙が浮かんでいるのに気付いている。私たち4人は一冊の讃美歌集を全員で見ながら歌う。一人が讃美歌集を広げて持ち、二人が横から、一人が逆さまに歌詞を見る形である。それから、皆、頭を垂れ、讃美歌の作者に吹き込まれた聖霊が彼らにも与えられることを切望して祈る。それは「お告げの祈り」の2倍の長さであった。

ウハラの家は、伊豆の景観において、小さな点に見える光である。クリハラの子の一人は明治学院に在籍しており、もう一人は卒業生である。また、長女はフェリス・セミナリー⁹を卒業し、今はバイブル・ウーマン¹⁰として松本でワイコフ夫人(Wyckoff)と共に働いている。彼女の婚約者はエディンボロ¹¹(Edinboro)で神学を学んでいる。その男性が、神学コースの一環として、松本の田舎で夏の伝道活動をしている最中に、二人は婚約を交わした。強い絆で結ばれたクリスチャンの幸福な家庭が誕生するであろう。そして、彼らのような存在は、あらゆる土地において影響力をもつ。このような形で神の国は発展するのである。

写真キャプション

A COTTAGE MEETING

P.29：上 小さな家屋での集会

PASTOR, BIBLE WOMEN ENGAGED IN SUMMER WORK AT GOTAMBA

P.29：下 御殿場での夏の伝道活動に従事する牧師とバイブル・ウーマンたち

RAILROAD STATION MEN AFTER A MEETING

P.30 集会後の鉄道員たち

RETURNING FROM A SERVICE

P.31 礼拝からの帰り道

Short Trips From Meiji Gakuin

BY W. E. HOFFSOMMER

Pictures in the Izu Field

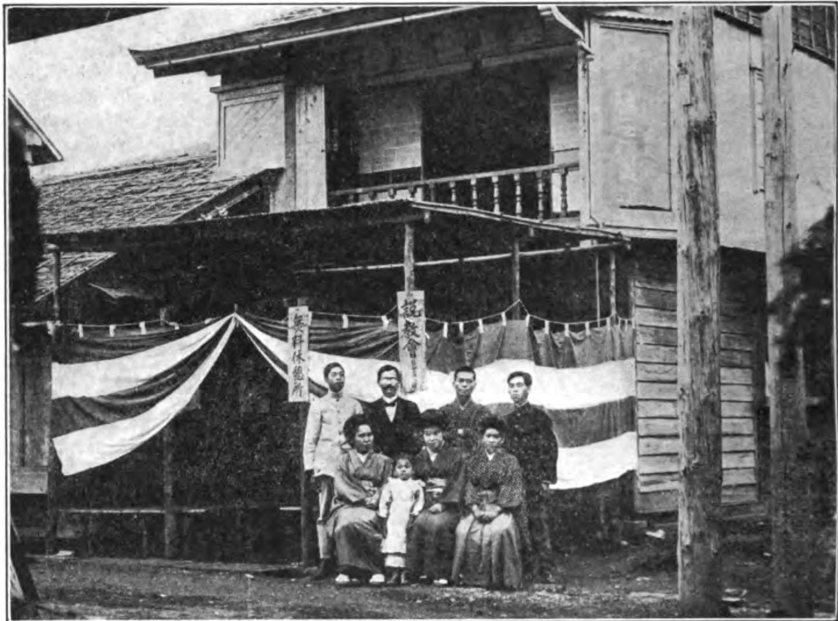


FIFTY years ago the sign boards against Christianity were not yet taken down, though foreign diplomatic pressure had made the execution of the punishments

less strict than it had been before. At that time Dr. Ballagh was rewarded by the first convert in the Izu field in the form of Serizawa Saibei. I know both these



A COTTAGE MEETING



PASTOR, BIBLE WOMEN ENGAGED IN SUMMER WORK AT GOTAMBA

men simply as old men who now have get-up-and-go about them enough to shame those of us who have done most of ours on the gridiron. I tramped over Amagi pass with these men when one was sixty-nine and the other was celebrating his seventy-ninth birthday by doing this "stunt" about which I would have boasted to my urbanite friends—had I not been

in such fast company. Well, the point of this paragraph is that these two men in the old days stood alone in that district one evening and hanging their lantern on one of these government edicts prohibiting this pestilential religion—they proclaimed it there that night. Of course they were stoned, but there was one convert came out of it.

With Kurihara—a Blind Man Who Sees



HE missionary in educational work must do his country touring when the school schedule gives him freedom. This time it was the Christmas vacation

that saw me out in the real country with one of the princes of evangelism—Kurihara, our man at Kashiwakubo, in the Izu field. He had been a school teacher there for fifteen years. The last three of these he was pestered by a certain farmer by the name of Uhara. This farmer had a persistent idea that Kurihara ought to be a Christian and so he kept at him every Sunday for three years to come to the little meeting that the few Christians in that district had. Finally Kurihara came and that changed the course of the man's life and the lives of three of his children. Uhara led Kurihara to Christ and the persecutors of those days were not slow to take note of the fact that the names were very similar and to make what capital they could out of it.

The camera tells many interesting things in the history of the spiritual regeneration of men and of nations but there will always be many pictures that will remain nowhere else than in someone's memory. And such a one I shall describe now. Here is the thatch roof of the farmer Uhara's house for a background. If you had stood on the road twenty-five yards away you would have seen four men,

three of them sitting and just finishing eating luscious dried persimmons that the old man, Uhara, who is standing, had taken from the pole near the edge of the garden. And, of course, the tea cups were there. Those seated are the missionary, his travelling companion evangelist, and Kurihara. A word of exhortation is suggested. Kurihara takes the lead, opens his well worn Bible, and standing by the side of his old father in the faith opens anew to him the Word. So near-sighted is he that his head bobs up and down as he follows the vertical lines not more than an inch from the page. From time to time he stops as he is reading the first of Philippians . . . "Christ shall be magnified in my body. . . . For me to live is Christ," and with uplifted hand drives the Scriptures home. I notice that there are tears in the old man's eyes.



RAILROAD STATION MEN AFTER A MEETING

We four sing from one book—one reading the letters, two of us sideways and one upside down, and then with bowed heads crave that Spirit that animated the writer of the words. It was the "Angelus"

doubled.

That house of Uhara is a point of light on the landscape of Izu. One of Kurihara's boys is in the Meiji Gakuin; one has graduated; his eldest daughter is a graduate of Ferris Seminary and is now doing work as a Bible woman in Matsumoto with Mrs. Wyckoff. Her fiance is in Edinboro studying theology; they became engaged down there in the lonely country as he was doing Summer work during his theological course. A strong Christian, happy home will be born, and what an influence that is in any land. In such ways the Kingdom advances.



RETURNING FROM A SERVICE

The Mission Field

Vol.27-6, October 1914

pp.230-231

A Christian Teacher's Influence

By Mr. W. E. Hoffsummer

クリスチャン教師の影響力

Mr. W. E. ホフソンマー

芝教会での定例のバイブル・クラスには数人の若者が参加している。その若者たちに関するとても興味深い出来事を話したい。彼らがクラスに集まった際、私は彼らにこう告げた。「私はもうこれ以上、君たちを必要としていない。君たちはこれから教師として日曜学校で定期的に教えなければならない。それはこれまで私が君たちに授けてきた知識を試すことを意味する」と。これは儀式ばらない卒業宣言である。4人の若者は、日曜学校に関わり始めて、自身の教会生活を受動的なものから能動的なものへと一変させた。もう一人の若者は、讃美歌を率先して歌った。この一団は、私の助言で、男性のコーラス隊を結成し、日曜の朝に奉仕をしている。実際、私は芝教会の近所から引越しをしてしまったので、現在は彼らの練習に立ち会うことはできない。だが、彼らはイースターの朝の礼拝で歌う讃美歌を23番に決め、練習を繰り返して、当日はピアノの伴奏に合わせて、讃美歌23番を見事に歌い上げた。

さて、この日曜学校の仲間に英語を話せない教会の若者たちの数人が加わり、彼らは私の下記の提案に応じて、見事なほどの活躍を示した。それは、教会の前の路上で夜に時折催されるストリート・フェアで、アマチュアの売り手として聖書を販売してみないかという提案であった。彼らにやる気を起こさせるのには、約1ヶ月の時間を要したが、ついに出店日を決め、7時を過ぎると、私たち8人はひざまずいて祈り——自主的に熱心に——、そして11時になると、私たちは再びひざまずいて感謝の祈りを捧げた。

私たちが俄かに聖歌隊を形成し讃美歌を歌い始めると、多くの人々が集まってきた。私たちは聖書について人々に語りかけ、購入を勧めた。大半の人々は長時間私たちのもとに留まっていたが、実際のところ、それほど多くの聖書を売ることはできなかった。だがしかし、開かれた場所で神の世界について群衆に語りかけることは、私たちの伝道運動と私たちが今その前に立っている教会というものを広く知ってもらうためには、素晴らしく効果があったと思う。夜の光に反射して教会が浮かび上がる景観もまた良かった。私たちは皆、恐れを追い払うような完全なる愛を得ていたのである。

3人の仲間のうちの1人は、まだ洗礼を受けていないが、この1ヶ月のうちに受洗するであろうと私は予想している。彼は、キリスト教の影響が及んでいる国に存在する熱心な若者の正に典型である。彼の疑いや疑問は、自由意志に関することに集中している。例えば、先週の日曜日、彼は古代アッシリアの都市ニネヴェの人々が悔い改めたことを神は知っていたかどうかと私に尋ねた。ある日は、礼拝の後、聖歌隊席で私たちは長く語り合った。そして、彼は受洗を約束した。彼の場合、それは信仰を公に告白することである。なぜならば、心の中では、彼はすでに信仰を維持しているからである。私との約束以来、彼はクラス集会で祈るようになった。これは以前の彼には見られなかったことである。

生徒たちは他のことにも関心があり、明治学院の教員代表として、今日私は新しい野球グラウンドを造る手伝いをした。と言うのは、新しい朗読室が建てられたことによって、古いグラウンドは狭苦しくなってしまったからである。

写真キャプション

MR. HOFFSOMMER AND HIS BIBLE CLASS

P.34 ミスター・ホフソンマーと彼のバイブル・クラスの生徒たち

A Christian Teacher's Influence

By MR. W. E. HOFFSOMMER



MR. HOFFSOMMER AND HIS BIBLE CLASS



HERE are some young fellows in my regular Shiba Church Bible Class that are very interesting. That is, they were in the class, but I unceremoniously graduated them by telling them I didn't want them any more, and they must teach in the regular Sunday School and exercise what I had given them. So four went there and they have changed their church life from the passive voice to the active. One of them leads the singing. This bunch have also formed a male chorus at my suggestion and so help out of a Sunday morning. Indeed, since I have removed from the vicinity and so cannot practice with them, they prepared the Twenty-third Psalm as a chant, and on Easter morning, unaccompanied by the organ, they sang it.

But this crowd, and a few others of the young men of the church who cannot speak English, have shown themselves beautifully when I suggested that we try our hand at amateur selling of Testaments at the night street fair held once in a while in front of the church building. It took about a month to get their courage up to the sticking point, but finally a night was decided upon, and shortly after seven o'clock eight of us knelt in prayer—voluntary and earnest—and at eleven o'clock we knelt in thanksgiving.

We formed ourselves into a choir and before long we had all the crowd we needed, and it stayed with us all evening as each one spoke of the Bible and its contents, and urged the people to buy it. Actually, not so many were sold, but the preaching of the Word in the open to the crowd was a fine advertisement for the cause and the church before which we stood, and its influence in a reflex way

was fine, too. We were all getting the perfect love that casteth out fear.

One of these fellows, not yet baptized, but whom I expect to be in a month, is quite typical of the earnest young men of the nation who are influenced by Christianity. His doubts and questions center about free will. For instance, on last Sunday he asked me whether God knew the people of Nineveh would repent. One day up in the choir corner we had a long

talk after service, and he promised me to receive baptism, which, in his case, is open confession, for he believes in his heart. He has prayed in our class meetings since, and this was something he would never do before.

Students have other interests, too, and to-day as a faculty representative of the Meiji Gakuin, I helped to lay out a new ball diamond, for the old one is being crowded out by the new recitation hall.

The Mission Field

Vol.27-8, December 1914

pp.296-297

Christmas Entertainments in Japan

By W. E. Hoffsommer

日本でのクリスマスの催し

W. E. ホフソンマー

日本人は総じて芝居好きのように私には思える。この傾向は、クリスマスの催しが開かれる際、とりわけ顕著な形で示される。その催しは、聖書史の中でも特にドラマテックな部分を紹介するために、非常に工夫された場面劇を上演することなしには成立しない。劇は完璧な衣装を身に着けて演じられる。——衣装の質は、この催しのためになされる献金の額と催しの責任者となった人物の芸術的ならびに民俗学的知識の程度によって、非常に幅がある。

そして、余談ではあるが、催しへの献金は、ほとんど毎年、その年の通常の献金額と比べて、はるかに高額である。しかし、この日は、クリスチャンではない多くの人々が、クリスマスを祝う催しがどのようなものであるのか、誘われて見にやってくる。そして、たとえ人ごみで十分に声が聞き取れなかったとしても、上演されているゴスペルの物語を常に彼らは見物できる。中世の奇跡劇の上演を強く思い起こさせるものである。

写真キャプション

TABLEAU REPRESENTING JACOB AND ESAU

P.38 ヤコブとエサウの場面

TABLEAU REPRESENTING ABRAHAM GOING TO SACRIFICE HIS SON,
ISAAC

P.39：上 アブラハムが息子イサクを生け贄にしようとする場面

TABLEAU REPRESENTING THE FIVE FOOLISH VIRGINS

P.39：下 5人の愚かな乙女たちの場面

Christmas Entertainments in Japan

BY W. E. HOFFSOMMER



TABLEAU REPRESENTING JACOB AND ESAU



It seems to me that the Japanese have a natural leaning toward the histrionic art. This characteristic comes out in a very marked way at the time the Christmas entertainment is given. There is never any performance without some highly worked up scenes illustrating some of the more dramatic parts of Bible history. These are given in full costume—the costumes differing very widely, according to the

amount of money that has been contributed for the expenses, and the artistic and ethnological knowledge of the one in charge.

And, by the way, the amount of money that is contributed to the entertainment is nearly always out of all proportion to the regular contributions for the year. But at that time many non-Christians are induced to come to the celebration and they can always see the Gospel story presented even if the voice does not carry to the outer rim of the crowd. One is reminded very strongly of the presentation of the Miracle Plays of the middle ages.



TABLEAU REPRESENTING ABRAHAM GOING TO SACRIFICE HIS SON, ISAAC



TABLEAU REPRESENTING THE FIVE FOOLISH VIRGINS

The Mission Field

Vol.27-12, April 1915

pp.498-499

Why Do You Come to This Bible Class?

Answers to This Question as Given by Students in Classes Conducted by Prof. W.E. Hoffsummer

なぜ君たちはバイブル・クラスに参加するのか？ クラスを受け持つホフソンマー教授からの問いに対する 生徒たちの応答

(注——明治学院のホフソンマー教授は、ボランティアで同校の若者のためにバイブル・クラスを開いている。以下に紹介する生徒たちからの応答は、英語を学びたいという気持ちとその他様々な動機が、彼らにバイブル・クラスへの参加を促したことを十分に示している。ちなみに、イニシャルは返答した生徒の氏名の頭文字である。)

キリスト教について知りたいとずっと希望していた。先週の日曜日、偶然、バイブル・クラスのお知らせを目にした。そして、とても嬉しく思い、直ちに参加することを決めた。Y. S.

なぜならば、聖書から何かを学び取りたいと思ったからであり、加えて、英語も学びたいからである。S. K. M.

二つの願望を抱いてバイブル・クラスにやって来た。一つは聖書を学ぶこと、もう一つは英語を学ぶことである。T. O.

ミスター・ホフソンマーがこの集まりに来るようにとおっしゃったからである。T. W.

ミスター・オリバラの親切な助言と英語を学びたいという気持ちからである。Y. M.

私はクリスチャンだが、まだ若いので、聖書の意味するところやキリスト教についてわからないことがたくさんある。それらについて真剣に学びたい。そのために、バイブル・クラスに参加し、先生から私が理解できていないことすべてを教えてもらいたい。M. T.

英語を学ぶ目的で来た。M. K.

聖書を学ぶために。Y. U.

ミスター・ミキの親切な助言と英語を学びたいという自身の希望から。S. O.

聖書を学び、宗教的な思想を鍛えたいと思ったから。M. K.

私の信仰は浅いものであるので、聖書や宗教の話に関する講義を聴き、信仰を深めたいと望んだからである。M. M.

なぜならば、神の存在を認識し、神を信じ、神の恵みを受けたいからである。喜ばしいことに、私は英語がすこし解る。なので、あなたの講義に参加しようと思った。M. N.

モラルを理解したいと思ったからである。S. T.

聖なる言葉を通して、これまでよりもずっと鮮明に神の姿を見出した。人は、祈りと聖なる言葉の双方を通じて、神を見、神に仕え、神を信じることができると私は考えている。T. S.

1. 親切な友人の助言を受けて。
2. 聖書と英語を学びたいので。 T. M.

信仰心を強めるため。 M. T.

私はクリスチャンであるにもかかわらず、聖書の知識がほとんどなく、それを学ぶ方法も持ち合わせていないので。 T. S.

写真キャプション

PROFESSOR HOFFSOMMER AND THE FIRST YEAR CLASS IN ENGLISH,
MEIJI GAKUIN

P.43 ホフソンマー教授と明治学院1年生の英語の授業

MEMBERS OF THE FENCING SOCIETY, MEIJI GAKUIN

P.44 明治学院の剣道部員

Why Do You Come to This Bible Class?

ANSWERS TO THIS QUESTION AS GIVEN BY STUDENTS IN CLASSES
CONDUCTED BY PROF. W. E. HOFFSOMMER



PROFESSOR HOFFSOMMER AND THE FIRST YEAR CLASS IN ENGLISH, MEIJI GAKUIN

(Note—Prof. Hoffsommer of Meiji Gakuin conducts voluntary Bible classes for young men of the school. These answers illustrate the character of the students' English and the various motives that prompted them to join the class. The initials are those of the students making reply.)

I have been longing to know of Christianity. Last Sunday it happened that I saw the notice about this Bible Class. And being very glad, I came here at once.

Y. S.

Because I want to get something from the *Bible*, and I want to learn English.

S. K. M.

I came to the Bible class with two desires, first is in order to study Bible, second is to learn English.

T. O.

For Mr. Hoffsommer told me to come this meeting.

T. W.

For kind advice of Mr. Oribara and for my want of learning English.

Y. M.

I am a Christian, but a young one, so

there are so many that I cannot understand in meaning in the Bible and about Christianity. And I want to know them earnestly. So I come to this Bible Class and I shall taught by the teacher all about what I cannot understand.

M. T.

I come here with the purpose of studying English.

M. K.

To study the Bible.

Y. U.

For kind advice of Mr. Miki, and for my want of learning English.

S. O.

Because I want to study Bible and to train religious idea.

M. K.

Because my faith is shallow and want about Bible, so I want to hear the lecture of Bible and religious story, and I want deepen my faith.

M. M.

Because I wish to acknowledge the existence of God, believe Him and be favored with His grace. To my gladness, I know English a little; so I attend your lecture.

M. N.

Because I want to understand moral.

S. T.

I want to see God more clearly through



MEMBERS OF THE FENCING SOCIETY, MEIJI GAKUIN

the Holy Words than ever. Because I think that a man can see and service and believe in God through both pray and Holy Word. T. S.

1. By the kind advice of a friend of mine.

2. For my want to study the Bible and English. T. M.

To strengthen my fath. M. T.
 Because though I am a Christian I have little knowledge of Bible and know not the method to study it. T. S.



<訳者注>

- 1 John Raleigh Mott (1865 ~ 1955) 米国ニューヨーク州の生まれ。YMCA ならびに学生キリスト教運動 (Student Christian Movement : SCM) の世界的指導者。1946 年ノーベル平和賞受賞。
- 2 東洋大学の創設者。現東京都中野区に「哲学堂」を創設。現在は中野区立哲学堂公園となっている。
- 3 インドの龍樹^{リュウジュ}と迦毘羅^{カピラ}、中国の荘子と朱子、日本の聖徳太子と菅原道真
- 4 米国オランダ改革教会海外伝道局の派遣により 1912 (大正 1) 年に来日した宣教師 (*Year Book of the Council of Missions (Presbyterian and Reformed) Cooperating with the Church of Christ in Japan Thirty-six Annual Report* issued by the Publications Committee in the Council 1913, p.105)
- 5 教師が一方的に話すのではなく、教師と生徒が対話を続けながら結論を導き出していく教授法
- 6 James Hamilton Ballagh 1906 年日本での伝道活動が認められ、母校ラトガース大学より神学博士の学位を授与された。(辻直人「J. H. バラ」、『長老・改革教会来日宣教師事典』, 新教出版社, 2003 年, 205 頁)
- 7 芹沢才兵衛 1875 (明治 8) 年受洗 (三島教会百年史編集委員会編『日本キリスト教団三島教会百年史』1985 年, 500 頁)
- 8 フィリピの信徒への手紙第 1 章 20 ~ 21 節 (新共同訳)
- 9 フェリス女学院の前身
- 10 宣教師や牧師の活動を助けた女性伝道者
- 11 米国ペンシルベニア州エディンボロ



Graduating Class, Steele Academy, Nagasaki.

長崎・東山学院の最上級生たち

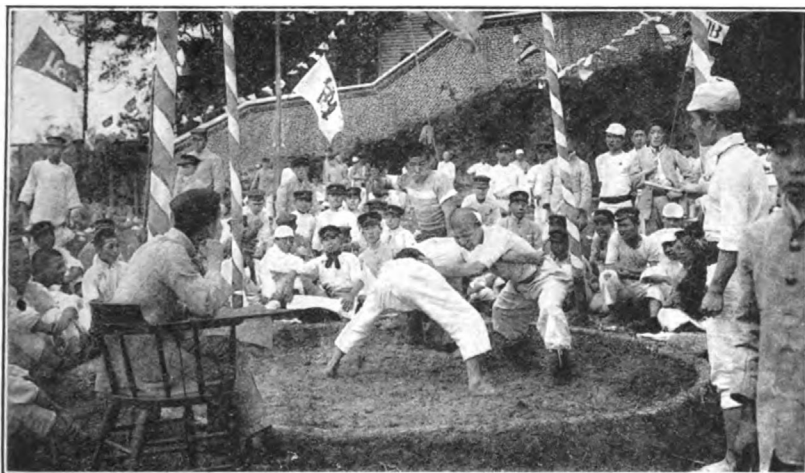
THE MISSION FIELD Vol.25-2 1912 P.65



Mr. Peeke and Japanese Theological Students.

東山学院のピーク宣教師と神学部生たち

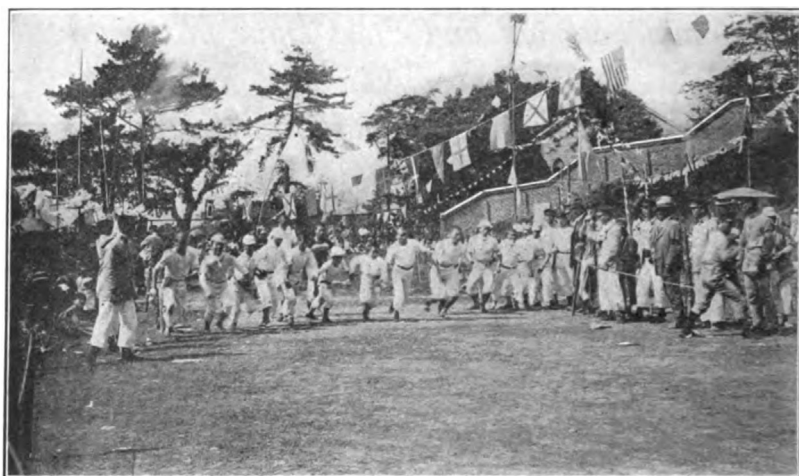
THE MISSION FIELD Vol.25-3 1912 P.107



JAPANESE WRESTLING—STEELE ACADEMY FIELD DAY

相撲—東山学院の運動会

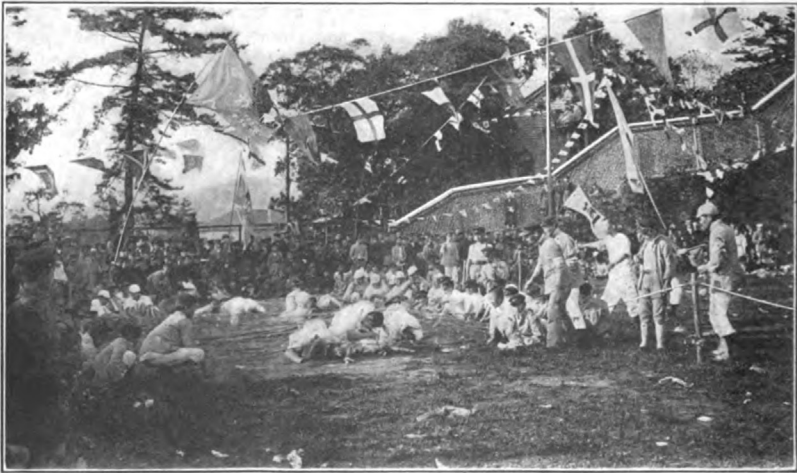
THE MISSION FIELD Vol.26-5 1913 P.159



STEELE ACADEMY FIELD DAY

東山学院の運動会

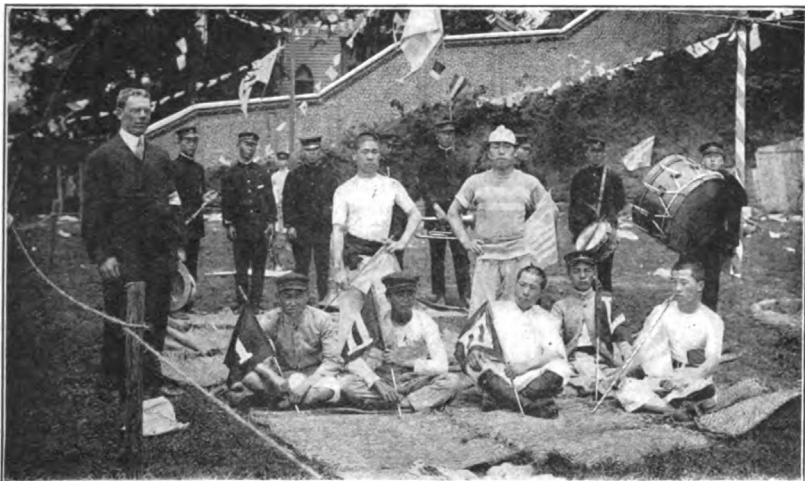
THE MISSION FIELD Vol.26-5 1913 P.160



OBSTACLE RACE—STEELE ACADEMY FIELD DAY

障害物競走—東山学院の運動会

THE MISSION FIELD Vol.26-5 1913 P.160



WINNERS OF THE "MARATHON"—STEELE ACADEMY FIELD DAY

マラソンの勝者たち—東山学院の運動会

THE MISSION FIELD Vol.26-5 1913 P.161



AT THE CHRISTIAN HOSPITAL FOR LEPERS

明治学院の宣教師らも運営に関わった
ハンセン病罹患者のためのキリスト教病院

THE MISSION FIELD Vol.27-1 1914 P.21



KARUIZAWA A. A. AND WASEDA SECOND

軽井沢で催された宣教師と早稲田の野球試合

THE MISSION FIELD Vol.27-2 1914 P.69



STEELE ACADEMY, GRADUATES AND GUESTS.

東山学院の卒業生と来賓

THE MISSION FIELD Vol.27-3 1914 P.102



THE HOTEL DINING ROOM .

浦賀の旅館での食事

ホフソンマー宣教師の引率によるウォーキング旅行の一日

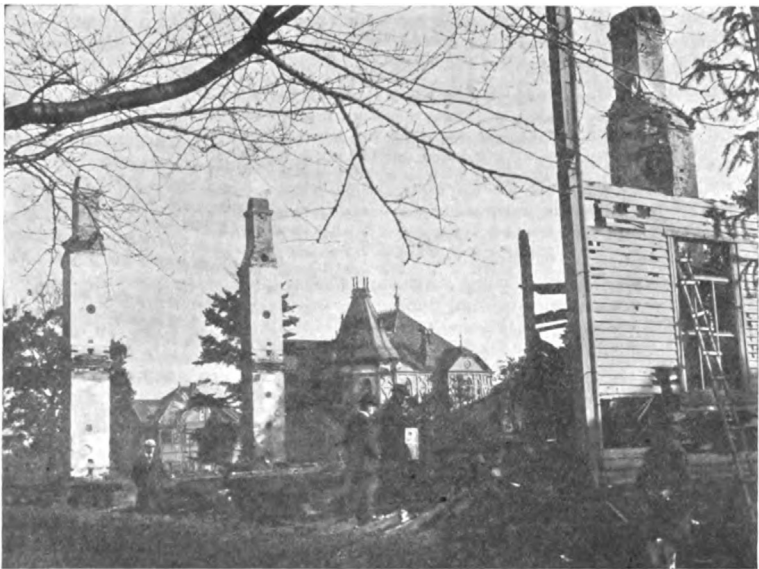
THE MISSION FIELD Vol.27-6 1914 P.215



THRESHING RICE NEAR THE SHORE

ホフソンマー宣教師一行が目にした浦賀の風景

THE MISSION FIELD Vol.27-6 1914 P.216



RUINS OF COLLEGE DEPARTMENT, MEIJI GARUIN

1914年11月24日の火災で焼失した明治学院の校舎

THE MISSION FIELD Vol.27-10 1915 P.415

明治学院歴史資料館資料集 第14集

2018年3月31日 発行

編集代表	播本 秀史
発行者	小暮 修也
発行所	明治学院歴史資料館 東京都港区白金台1-2-37 電話 03-5421-5170
印刷所	河北印刷株式会社 東京都千代田区神田北乗物町1-1 イトーピア神田共同ビル2階



Meiji Gakuin Historical Museum 2017